飛鳥の古和同銅銭

松　村　恵　司

Ⅰ．はじめに

2000年３月のこと、久しぶりに明日香村教育委員会の文化財展示室を見学した際に、不思議な銅銭が展示ケースの一角にあるのを発見した。キャプションには和同開珎とあるが、どうも見慣れた和同銭とは醸し出す雰囲気が異なる。急ぎ事務室にいた納谷氏に展示ケースを開けてもらい、実物を手にとって観察したところ、まぎれもない古和同銅銭である。話を聞くと、納谷氏が1992年に発掘調査した西橘遺跡の井戸底から出土したとのこと。

ことの重大性を説明し、資料を借用して成分分析をおこなった結果、予想通りに、アンチモンを含有する初期貨幣特有の金属組成であることが判明した。しかも銅銭は残りが良く、背に明瞭な轆轤痕跡が認められるなど、古和同銭の製作方法を解明する上できわめて重要な情報を秘めている。早速、納谷氏に分析結果を報告し、資料の重要性を力説したが、彼はいつものごとくニヤニヤと笑いながら「ああ　そうですの」と猫に小判の返答。ようやくのこと、暇になったら二人で資料紹介を執筆する約束をとりつけたが、雑務に追われている内に、納谷氏は帰らぬ人となってしまった。果たせなかった約束に対する後悔の念が尾を引きつつ今日に至る。

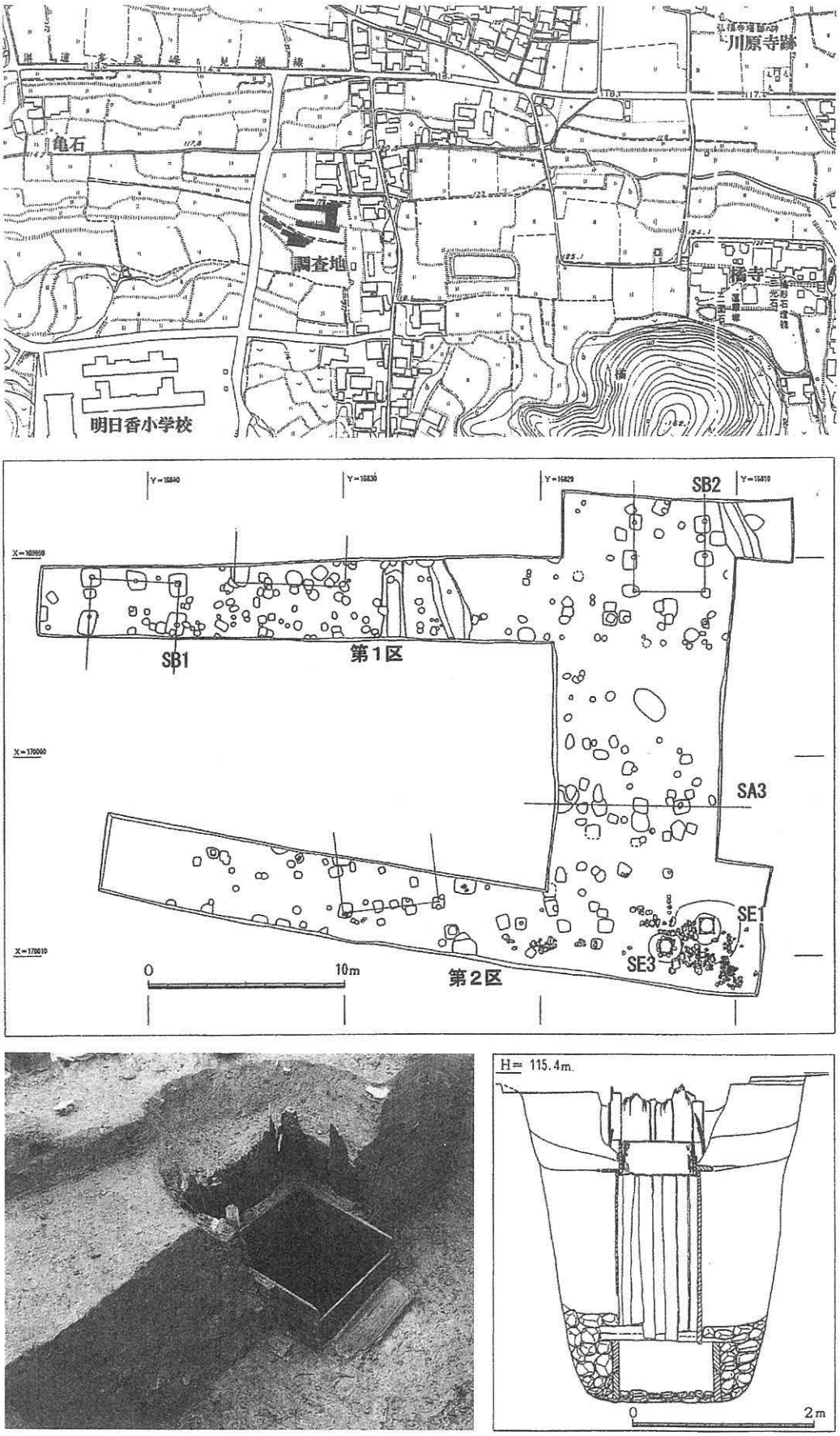
納谷氏が発掘した古和同銅銭は、かつて天武朝の銅銭の有力な候補に挙げられてきた銅銭である。古泉界では笹手和同と呼ばれ、古和同中の初出の品とされるなど、奇観の銅銭として重要視されてきたが、これまで考古学的な検討の俎上に上ることはなかった。本資料は、飛鳥池遺跡の発掘調査で明らかになった富本銭と和同開珎の系譜を考究する上で、また和同開珎の発行の経緯や製作地、製作方法を考える上で、きわめて貴重な資料である。共同執筆の約束は実現しなかったが、この小稿を納谷氏のご霊前に捧げ、約束の一端を果たすことにしたい。

Ⅱ．西橘遺跡の調査

西橘遺跡は、その遺跡名が示すように史跡橘寺境内の西方に位置する遺跡である。1992年度に明日香村中山間地域農業基盤整備に伴う事前の発掘調査が行われ、納谷氏が調査を担当した。氏の急逝により正式な調査報告書は未刊であるが、平成４年度の『明日香村遺跡調査概報』に調査の概要が報告されている[1]ので、それを参考に古和同銭の出土遺構を概観したい。

調査地は、橘寺の西方300ｍの丘陵とそれに南接する谷水田で、調査区を４カ所に設け、全体で758㎡の発掘調査がおこなわれた。丘陵上の調査区からは、第１図に見るように掘立柱の南北棟建物４棟、塀、溝、井戸、石敷などが検出されたが、遺構の所属時期や遺構変遷に関しては詳細が明らかでない。一方、南に設定した調査区では、旧地形の丘陵斜面と谷地形が検出され、丘陵上から投棄された大量の遺物群が出土した。中でもまとまって出土した木簡群は、未報告ながらも斉明朝に遡る木簡群として注目を集めている。

古和同銅銭の出土遺構は、丘陵上の調査区の南東隅で発見した井戸ＳＥ１である。この井戸は、直径3.5ｍ、深さ3.5ｍの掘形をもち、三段に組んだ特異な構造の井戸枠からなる。最下段は内法90㎝、高さ60㎝の方形横板組の井戸枠で、内部に玉砂利を敷き、外部を人頭大の石で充填して濾過装置とする。中段の井戸枠は、長さ1.5～２ｍ、幅５～10㎝、厚さ５㎝の縦板20枚



第１図　上段：西橘遺跡の位置、中段：調査遺構図、下段：井戸ＳＥ１と断面図

を楔で連結して円形の桶状に作り、下段の方形枠の角に重ねた板上に設置する。最上段の井戸枠は、中段の桶の上端に組まれた横板組の方形の井戸枠である。この井戸は、周囲に部分的に残る石敷から、本来は石敷井戸であったと考えられている。

問題の古和同銅銭は、この井戸底から萬年通寶、刀子各１点とともに出土した。

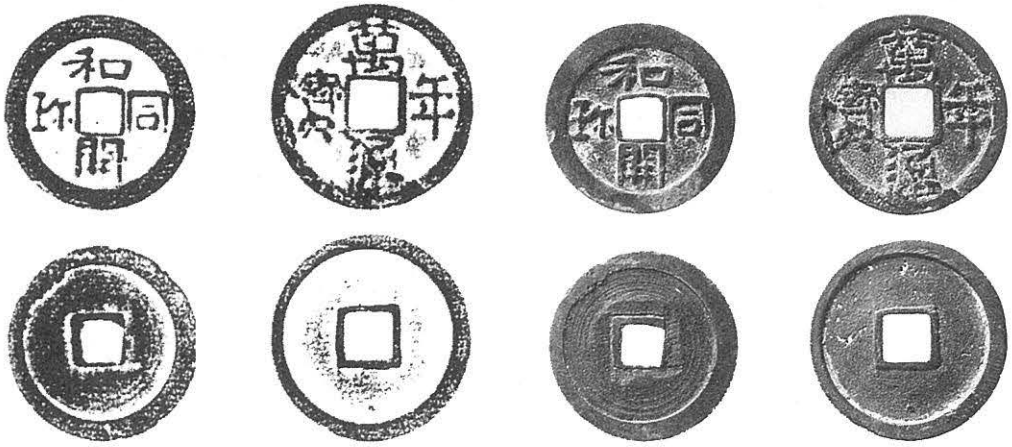
ここで注意しなければならないのは、井戸ＳＥ１が後世の改修を受けている点である。改修は、上部の井戸枠の外側に穴を掘り、四隅に角材を立てて横桟でつなぎ、縦板で囲う仕事をしている。掘形から瓦器が出土し、改修時期は中世に下るが、概報は「ＳＥ１を補修したものか」と簡略な記述にとどまり、井戸の再利用の実態は詳細が不明である。古和同銭が井戸に投入された時期を考える上で、井戸の掘削時期や使用期間、改修の経緯などが問題となるが、それを明らかにするためには出土遺物の整理、分析作業を待たねばならない。

Ⅲ．出土古和同銅銭

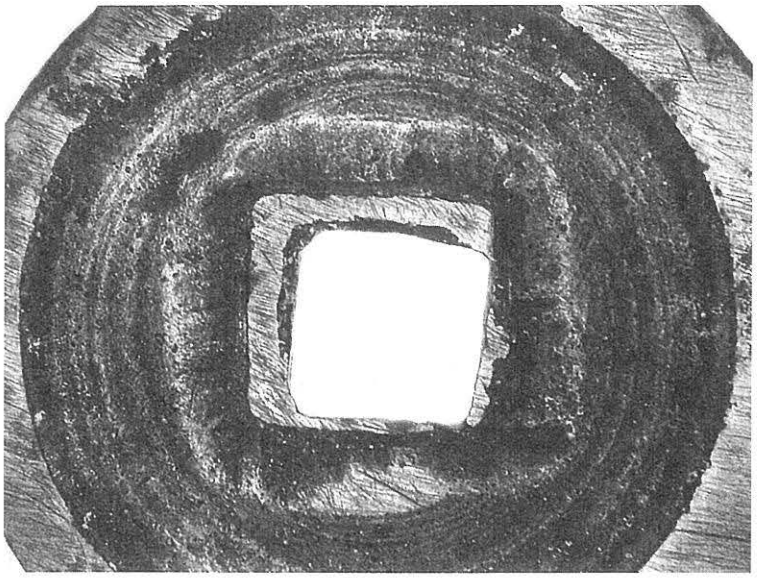
ＳＥ１の井戸底から出土した和同開珎は、銭径縦24.95㎜、横25.00㎜、重量5.15ｇを測る重量感溢れる大型の古和同銅銭である（第２図参照。以下、本銭を西橘銭と呼ぶ）。遺存状態が良好で銹化はほとんどみられず、全体に黒褐色の光沢を放つ。特に平地部分の黒色味が強く、「和」字の禾部分を中心に黄銅色の地金が顔をのぞかせる。表裏（面背）の輪や内郭の上面、文字面には顕著な擦痕状の研磨痕が認められ、研磨痕は面で縦方向、背で横方向に走る。面の輪幅は2.65～3.0㎜と広く、方孔（穿）は縦5.17㎜、横5.28㎜、内郭は縦6.5㎜、横6.7㎜を測る。方孔内は鑢がけが施されており、内側面に顕著な鑢目が残る（第３図ｂ）。

銭文の字体は、新（普通）和同とは大きく異なり、四字の縦画末端が細く尖る点に最大の特徴がある。尖った末画が笹の葉のごとくに見えるので、古くから「笹手」もしくは「笹書」と呼ばれる古和同銭である。「和」「開」字が輪から離れて内郭に寄り、新和同の字体に比べると小字である。

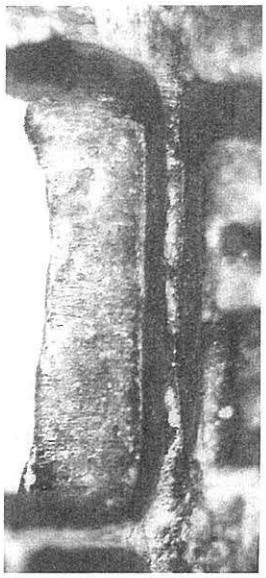
各字体の特徴を列記すると次のようになる（第３図下段の拡大写真参照）。「和」字は、輪と内郭から離れて横長となり、偏の第２画が長く、旁の口は逆台形となる。「同」字は、構えの下端が細まり、構えの中の一と口が下降する。「開」字は不隷開で全体に右傾し、湯回り不良のために門構えや旁の一部が消失する。「珎」字は、偏よりも旁が小さく、旁の第１画が偏の第２画と連結する。また旁の縦画が短く、第４・５画は点で表現される。



第２図　西橘遺跡井戸ＳＥ１出土銭貨

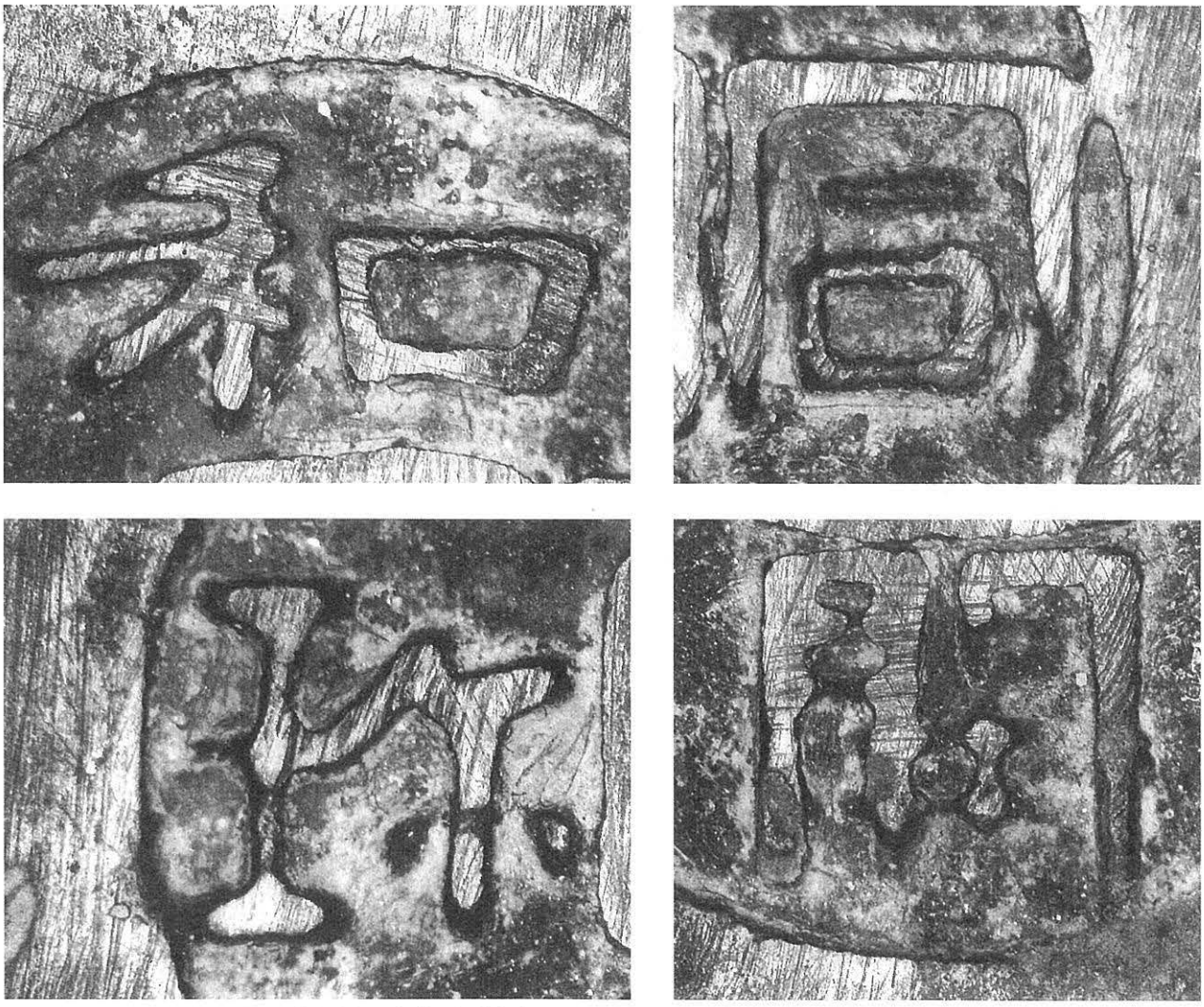


a：銭背の加工痕跡



b：方孔の鑢痕跡

c：輪側の仕上げ痕跡



d：銭文「和」「同」「開」「珎」

第３図　西橘遺跡出土古和同銅銭の拡大写真

銭背は、第３図ａに見るように、平地部分に轆轤による回転削りの痕跡と、タガネ状工具で背郭を削り出した痕跡が認められる。轆轤痕跡は輪と背郭の中程に及び、そこから背郭にかけてはタガネ状工具による顕著な削り痕となる。背郭は、方孔の周囲に0.8㎜幅の郭を設けるように縦6.8㎜、横6.9㎜の範囲をタガネで線彫りし、その外周を削って郭を作り出している。表裏の笵の型合わせがずれ、背郭幅は「開」「珎」の裏面で0.4～0.6㎜、「和」「同」の裏面で1.1～1.3㎜と不均一になり、背輪幅も3.2～2.1㎜と広狭の差を生じている。

輪側には轆轤仕上げの痕跡が筋状に残り（第３図ｃ）、輪の角は直角に近い。平地の厚さは1.05～1.15㎜、輪厚は1.8～1.9㎜を測る。

本銭の金属組成は、非破壊の蛍光Ｘ線分析の結果、アンチモンを９％ほど含有する銅 - アンチモン合金であり、富本銭の金属組成と類似する点が注目される。

共伴した萬年通寶は、銭径26.2～26.3㎝、重量4.59ｇを測る通有の字体の萬年銭である。

Ⅳ．古和同と笹手和同

和同開珎は、字体や作りが異なる古和同、新和同の二種に大別される。両者を比較すると、古和同は文字が歪み不規律で個体差が大きく、同一書体の銀銭と銅銭が存在するのに対して、新和同は文字が直線的に図案化され、唐の開元通寶に類似した作りとなり、同一書体の銀銭は存在しない。このため古和同は渾重、古朴、新和同は軽妙、整然などと表現されてきた。新和同は平城京などから普遍的に出土し、伝存数も多いことから、普通和同とも呼ばれている。

さらに大きな相違点としては、新和同が「開」の字の上端が隷書風に開いた「隷開」で統一されるのに対して、古和同は「不隷開」の字体が主流を占め、少数ながら「隷開」の字体をもつ銭種が存在する。同一書体の銀・銅銭が存在する古和同を初鋳、同一書体の銀銭が存在しない新和同を後鋳の和同開珎と考えるのが古泉界の通説である。

古和同はその字体や方孔の大小、輪郭や字文、形制などに小異が著しく、「笹手」「大字」「縮字」「小字」「広穿」「隷開」などに細分されている[2]が、その中でも独特の字体をもつ笹手和同は、「古和同中ノ初出」と位置付けられ[3]、古和同の中でも特に珍重されてきた。

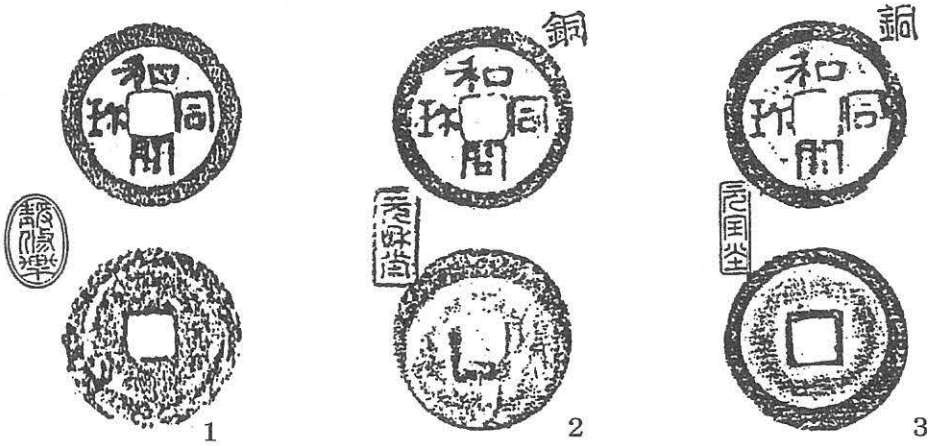
大正から昭和戦前期にかけて、古和同銭を精力的に収集研究した田中啓文によると[4]、収集界における古和同銭の伝存数は百数十枚ほどで、銀銭が大多数を占め銅銭は稀少とされる。

また近年、泉譜に掲載された笹手和同の拓影図を集成した鈴木秋男によると[5]、これまでに知られている笹手和同は、銅銭が６枚、銀銭が20数枚ほどとされる。その一部を第４図に掲げたが、このうち出土遺跡の明確なものは、８の中国の何家村、９の室生寺如意峯の出土品で、いずれも銀銭である。また１～３の笹手銅銭は出土地が不明ながらも、２が現在国立歴史民俗博物館の所蔵品、３が日本銀行の所蔵品となっている。ともに銭貨の計測値や成分分析結果が公表されており、西橘銭との比較が可能な好資料である。特に３は、銭径24.67～24.98㎜、重量4.67ｇを測る大型品で、銭背に明瞭な轆轤痕跡が見られるなど、西橘銭に酷似した特徴を備えている。

一方、発掘調査による古和同銅銭の出土例も稀少で、これまでに知られる出土は、平城京東三坊大路東側溝、藤原京右京七条一坊西南坪、藤原京右京一条一坊西北坪から各１点、大阪市細工谷遺跡から２点の４遺跡５点が確認されているにすぎない。中でも平城京東三坊大路東側溝出土銭は、笹手の特徴をもつ古和同銅銭であるが、「同」「開」字を残す半欠品である。

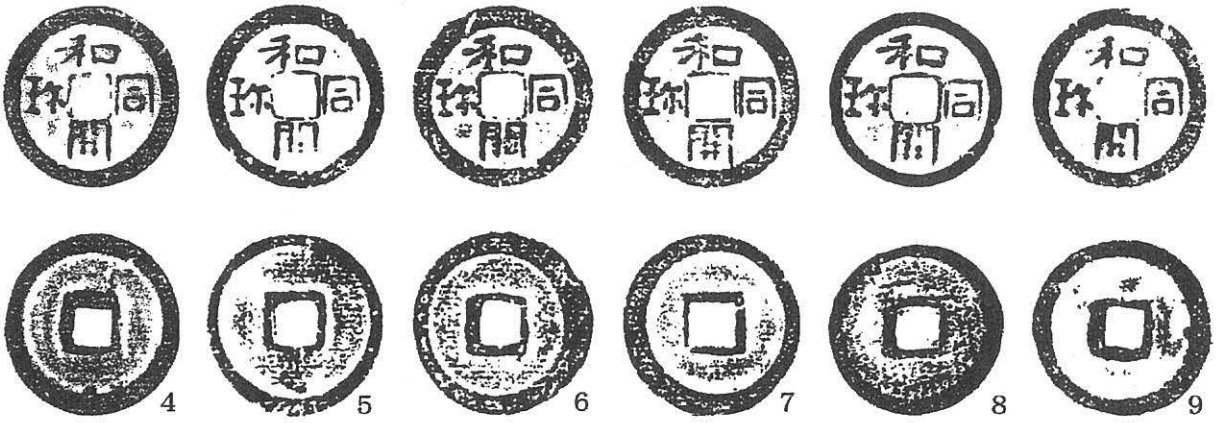
このように古和同銅銭の現存数は、新和同に比べると圧倒的に少なく、しかも銀銭の現存数

笹手和同銅銭



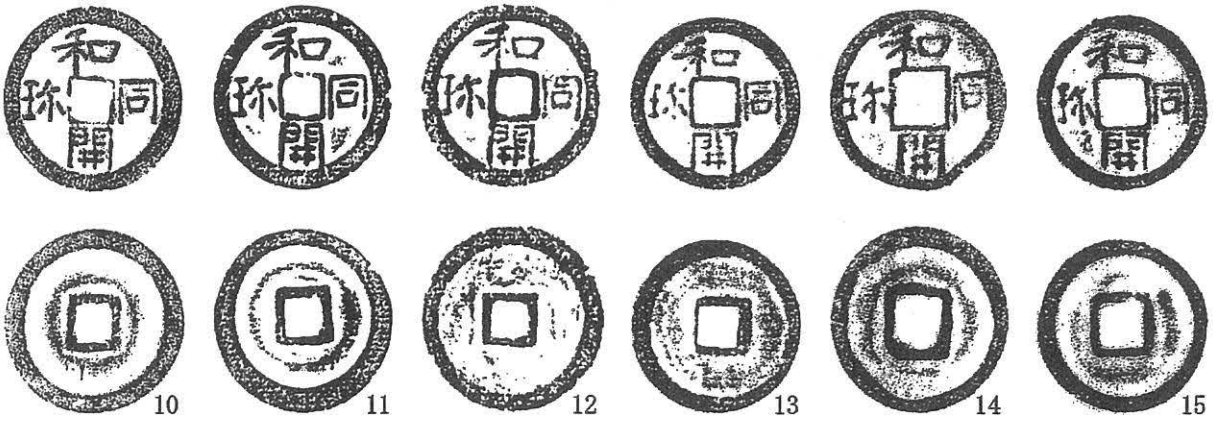
歴史民俗博物館所蔵　　日本銀行所蔵

笹手和同銀銭



中国何家村　　室生寺如意峯

古和同銭にみえる轆轤痕跡



大字　　大字背旋辺　　背小郭　　縮字　　広穿不隷開　　広穿隷開

第４図　古和同銭拓影図（上段：笹手銅銭、中段：笹手銀銭、下段：鏟辺の残る古和同銭）

が銅銭を上回るという発行当時の状況とは逆転現象を生じている。このため、銅銭を銀銭の母銭とみる説が古泉界に広く流布してきた。

明治29年（1896）、岡田村雄は、古和同を天武紀の銀・銅銭にあてる説を提唱した。[6] 古和同天武朝創鋳説である。この説は従来の通説を覆す破天荒な説であったが、当時の懸案課題を合理的に解決しうる仮説として、古銭研究者をはじめ考古学・古代史・経済史などの研究者の間に急速に浸透し、大正末年から昭和戦前期の古泉界を席巻した。古和同銭は、飛鳥池遺跡の調査で富本銭の鋳造年代が明らかになるまで、長らく天武朝の銀・銅銭の有力な候補と考えられてきたのである。[7]

Ⅴ．古和同と鏇辺

古和同の銭背に轆轤仕上げの痕跡が認められることは、大正時代に着目されはじめ、鏇辺（せんべん）、もしくは旋辺と呼ばれてきた。その初見は、大正７年（1918）に『古銭』誌上に紹介された古和同銅銭の解説で、「銅鋳なるが故に背に鏇辺あり今回の初見に係る記して諸君の鑑定を仰がんとす」と指摘されたのが初めであろう。[8]

大正12年（1923）、浜村栄三郎は古和同銀銭の分類をおこなう中で、「銀銭の特徴として背旋辺又は旋辺様の品多し、旋辺は何に因りて生ずるかを研究すべし」と指摘し、それが木製の種銭（木型）を製作する際の加工痕跡であると推測した。[9] 同年、鷲田呆仙は、古和同の「隷開広穿の銀銭と、(中略)、笹手和同及び新式を加味せる隷開の銅銭等には、背平地に古銭家のいふ所の旋辺の跡を有するものあり、この法こそ銭背の不鮮に陥りたるを補ひ改修して、銭容を飾るに利なる新進の手段と言つべし」と、旋辺を銭貨の鋳造後に銭背を改修した痕跡と理解した。[10]

このように古和同の銭背に残る轆轤痕跡（鏇辺・旋辺）が、古和同銭の製作技法と密接に関係するという認識が次第に定着していくが、昭和26年（1951）、古和同銭研究の大家であった田中啓文は、轆轤削りや轆轤研磨痕跡のある古和同銅銭の銭背が、寛永通寶の鋳浚母銭の背に類似することから、轆轤痕跡をもつ銅銭を母銭と推定した。[11] さらに田中は、古和同銭に小異の変化が生じた原因を、仏工が古和同銭を一点ずつ鋳造し、鋳浚いをした結果と考え、古和同銭を天武朝の貴人が仏師に命じて作製した私鋳銭と推断した。その後の古和同銭研究は、資料の希少性が原因して、実物資料に即した研究が停滞して現在に至る。

Ⅵ．鋳銭工程から見た母銭と種銭

このように、古和同の銭背に特徴的な轆轤痕跡（鏇辺・旋辺）は、母銭の製作痕跡もしくは改修の痕跡と推測されてきた。そこで再度、西橘銭の銭背を子細に観察すると、Ⓐ轆轤削りの回転軸が銭の中心を外れていること、Ⓑ笵ズレにより背輪や背郭が広狭の差を生じていること、Ⓒ背輪と平地の境に笵傷とみられる損傷箇所が認められること、Ⓓ轆轤削りの痕跡上にわずかながら鋳溜まりが存在することなどから、轆轤削りを鋳造後の改修の痕跡とした鷲田説は成立しがたいことが分かる。

では浜村栄三郎や田中啓文が想定したように、轆轤痕跡は木製の種銭（木型）や母銭の加工痕跡であろうか。

この問題を考えるためには、まず母銭と種銭の関係を整理、検討する必要があるだろう。現在、母銭と種銭の呼称については混乱が多いが、本稿では通用銭の鋳造に用いた銭を種銭、種銭の鋳造に用いた銭を母銭、彫刻された最初の原型銭を彫母銭と呼んで区別することにしたい。

最初に江戸時代の天保通寳当百銭の鋳造風景を描いた「鋳銭座絵図」[12]をもとに、近世の種銭の製作工程を見てみよう。「鋳銭座絵図」に描かれた種銭鋳造場の図には、「先ず其基本とすべき一枚の百文銭を彫刻す　之れを母銭と云う　之れより種銭を鋳造するに其母銭の損害せざらんがため先ず錫を以て数十枚を鋳写す　之れを錫種銭と云う　此の錫種銭より数千の唐銅銭の種銭を鋳造し　之れを鋳形として通用百文銭を鋳製す」と解説が付されている。江戸時代には、彫刻した原型銭（彫母銭）だけを母銭と呼び、それを鋳写したものを全て種銭と呼んでいる。「鋳銭座絵図」によると、１枚の彫母銭から、まず数十枚の錫種銭が鋳写され、さらに錫種銭を鋳写して通用銭鋳造用の銅種銭が作られている。銅種銭の製作数は数千枚に及び、鋳銭作業に大量の種銭を必要としたことが分かる。錫母銭の開発は寛文８年（1668）のこととされるので、それ以前は彫母銭（原型銭）を銅で鋳写して第一次母銭を作り、さらにそれを鋳写して銅種銭を作る工程が一般的であったと推測できる。

次に古代銭貨の母銭について考えてみよう。古代の母銭については不明な点が多いが、最後の皇朝銭「乾元大寳」発行の経緯を記した『九暦』や『西宮記』に、わずかな手懸かりが残されている。それによると、天徳２年（958）、50年の長きにわたって流通した延喜通寳に代わり、新銭が発行されることになった。その改銭の次第は、①勅命を受けた大臣が博士に銭文の候補を勘申させ、奏聞して銭文を決定する。②吉日を選び能書の者を召して銭文の様を書かせ、奏聞して書体を決める。③決定した銭文の様を作物所に送り、原型銭を彫り定める。④出来上がった原型銭に太政官符を添えて鋳銭司に下す、という流れを辿る。その後新銭の鋳造には１年近くを要し、天徳３年（959）４月に新銭が親王以下諸司の官人や寺社に頒賜されている。

この史料から、作物所で彫母銭（原型銭）が作られ、それを配布された鋳銭司が鋳銭作業用に母銭や種銭を製作し、実際の鋳銭作業をおこなった様子を窺うことができる。

古代の母銭の実物資料としては、平城京左京三条二坊二坪の井戸ＳＥ4580から出土した和同開珎（新和同）の銅製母銭が注目される。[13] この銭は、銭文の字画に沿ってタガネで文字を際だたせており、型抜けしやすいように輪や郭の縁を丸く仕上げるとともに、銭文や輪、内郭の突起部分を丁寧に研磨するなど、明らかに通用銭とは異なる細部の特徴を有している。石川諄は、この銭が直径25.96㎜、内径21.84㎜を測り、通用銭よりも一際大型であることから、これを「原母銭」（彫母銭）とみなし、この原母銭から第一次、第二次の母銭が作られ、通用銭が製作されたと推測する。[14] 注目すべきことに、この母銭にも背輪を轆轤で削り出した痕跡や、背郭をタガネで削り出した痕跡が残るものの、平地全体を平滑に磨く丁寧な仕上げにより、肉眼では容易に観察できぬほどの微々たる痕跡と化している。新和同の銭背が古和同と一連の技法によって作られたことが分かるが、新和同の銭背の仕上げに格段の進歩の形跡が認められるのである。

銭貨を鋳写していくと、鋳縮みにより銭径は次第に縮小化に向かう。この縮小率に関しては、日本貨幣協会が鋳写しを繰り返した鋳造実験により、外径の鋳縮みの平均値が1.68％という結果が得られている。[15] 平城京から出土した和同開珎の平均径は24.6㎜であるので、鋳縮みに着目しながら鋳写しの状況を復原すると、彫母銭（25.96㎜）→第一次母銭（25.52㎜）→種銭（25.09㎜）→通用銭（24.67㎜）という結果が得られる。石川が指摘するように、この彫母銭を鋳写して第一次母銭が作られ、それを鋳写した種銭から通用銭が鋳造された可能性はきわめて高く、先に見た江戸時代の種銭製作工程と同様に、彫母銭→銅母銭→銅種銭→通用銭という工程が復原されるのである。本資料は、現在知られる唯一の古代の彫母銭であり、新和同の鋳銭技術を解明する上で、きわめて貴重な資料である。

Ⅶ. 西橘銭の鏇辺と種銭の製作技術

以上の検討を踏まえ、改めて西橘銭の鏇辺の性格を考えてみることにしたい。

古泉界では、稀少な古和同銅銭を銀銭の母銭とする説が根強いが、西橘銭が母銭の可能性はあるのであろうか。第Ⅲ節で見たように、西橘銭の背輪や背郭は范ズレにより幅が不均一で、字画の一部を欠失しており、これを母銭と見ることはできない。第4図3の鏇辺を持つ日銀銭も同様であり、この銭は鋳不足のため「開」の第7・8画、「珎」の第8画を欠く。また2の歴博所蔵銭（銭径24.53～24.57㎜、重量4.44ｇ）は、鋳型の表裏の型あわせがずれ、銭背の郭や輪が著しい偏りを生じている。いずれも鋳造欠陥があり母銭とは考えがたい。.

西橘銭は、面背の研磨や方孔内の鑢仕上げ、輪の轆轤仕上げの状態から、完成品であることに疑いはなく、古和同銅銭の通用銭の姿を伝える品と判断できるのである。

では浜村栄三郎が想定したように、鏇辺は木製の種銭（彫母銭）の加工痕跡であろうか。

浜村は、奈良時代の百萬塔の轆轤技術と鏇辺の共通性を例証に掲げるが、そもそも脆弱な木製の彫母銭を、通用銭鋳造時の種銭に用いたとする推測は、非現実的な空想にすぎない。浜村説に従うと、古和同銭の生産に際して膨大な量の彫母銭が必要になるが、そうした非効率、非合理的な方法は、規格ある銭貨の大量生産には不適であり、富本銭から新和同への鋳銭技術の発達史から見ても[16]到底支持できるものではない。

そこで、西橘銭の表裏の鋳写しの状態に着目すると、鏇辺が明瞭に鋳写された銭背に対して、文字面には、文字を彫刻した痕跡や平地の加工痕跡が見られず、表裏の鋳写しの状態が著しく不均質であることに気付く。この事実は、轆轤削りが種銭に直接施されたことを物語ると同時に、母銭から鋳造された種銭の型取りが文字のある銭面側だけで、銭背が平坦な状態で鋳造された状況を推測させる。すなわち第5図に示したように、①背が平坦な種銭を轆轤の回転軸に固定した木枠にはめ、銭背の輪と平地を削り出す。平地部分の轆轤削りは、背郭をつくる必要から、最大でも郭の角近くまでしか施せない。その結果、方孔の周囲に円盤状の突起が残ることになる。②銭を轆轤から取り外し、中央に残る円盤状の突起部分にタガネで方郭の縁を線彫りする。③郭外に当たる高まりをタガネで平らに削りとり、轆轤削りの平地と一体化させる、といった種銭の銭背の加工方法が想定されるのである。

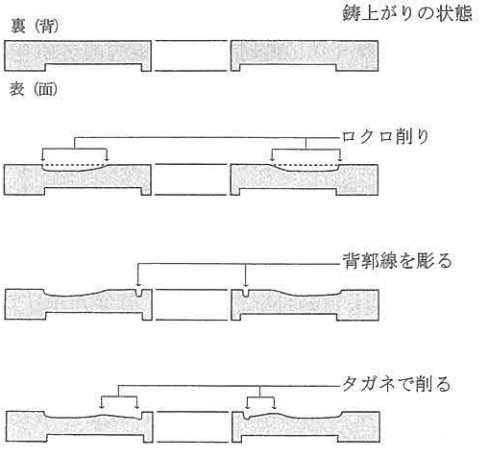
このように轆轤を使用して古和同の背輪を正円に作り出す作業は、タガネを使用して背郭を作り出す作業と、一体的な銭背の加工方法であると理解できることになった。

Ⅷ. 古和同銭の生産と技術改良

富本銭の背輪は手彫りにより大きく歪む。これを是正する方法として考案されたのが轆轤回転を利用した古和同の背輪の削り出しであろう。

しかしながらそうした轆轤加工が種銭段階で施されたとすると、種銭以前の母銭の型どりや彫母銭自体が文字面だけであった可能性が生じ、次のような種銭の製作方法を復原できる。

Ⓐ彫母銭の文字面だけを鋳型に押印し、背は押印せずに平らな状態で鋳造する。Ⓑ文字面の鋳上がりの良い銭を選別し、轆轤で背輪と平地を削り出し、タガネ



第5図　種銭の銭背の加工方法

で細部加工をおこない銭背を完成させる、という方法である。Ⓐから Ⓑの間に第一次母銭の鋳写しがおこなわれた可能性が高いが、その場合もⒶと同様、文字面だけの鋳写し作業となる。

Ⓐの方法により、同一鋳型に彫母銭の文字面を連続して押印することができ、一時に複数の彫母銭の転写が可能となる。またこの方法により、鋳上がりの良い文字面をもつ銭の選別、すなわち種銭や母銭に適した銭の摘出が容易となる。さらにⒷの方法により、背輪と背郭を正確に作り出すことができ、母銭の表裏を型取りして鋳造した際の范ズレによる損耗を回避できる、などの利点があり、復原された種銭製作方法が、きわめて合理的な方法であることが分かる。

これまで古和同銭の銭容の多様さが繰り返し指摘されてきたが、それは複数の彫母銭の存在と、種銭の多様さを意味する。古和同の銭背に注目すると、第4図下段に示したように、各銭種にわたって轆轤痕跡や、背郭を作り出したタガネ痕跡が広範に認められるのである。この事実は、古和同の彫母銭や種銭の製作が、特定の工房で一括しておこなわれた可能性を示唆する。

こうした古和同の種銭製作方法は、富本銭の背輪の歪みを修整するための技術改良とも評価できるが、それは所詮、種銭の製作工程における技術改良に過ぎず、この方法を駆使しても通用銭の大量生産には直結しない。通用銭の大量生産を実現させるためには、数多くの鋳銭炉を同時に稼働させる必要があった。和銅元年（708）の近江国、大宰府、播磨国などの地方官衙における鋳銭活動は、まさしくそうした事態に呼応する措置であったと推測されるが、それは必然的に地方の鋳銭工房に供給すべき種銭の量産化を要請することになった。鏇辺は、種銭の量産化に向けて考案された新たな銭背加工技術と考えられるのである。

以上のように、西橘銭に残された鏇辺の背後には、和同開珎の大量発行に向けて、短期間のうちに要請された銭貨生産体制の構築と統括、各地の鋳銭工房における鋳造技術の偏差の縮小といった、様々な銭貨生産の課題が見え隠れするのである。

紙幅の関係で古和同銭の生産体制に関する予測は別稿に譲るが、納谷氏が発掘した西橘銭は、古和同の製作方法や生産体制を解明する上で、きわめて重要な考古学的情報を秘めた資料であることを、改めて強調して擱筆することにしたい。

註

1）納谷守幸「中山間地域農業基盤整備事業に先立つ調査(西橘地区)」『明日香村遺跡調査概報平成4年度』(1993)
2）小川　浩『新訂皇朝銭図譜』昭和61年（1986)。同『日本古貨幣変遷史』昭和58年（1983)
3）奥平昌洪『東亜銭志』岩波書店、昭和13年（1938)
4）田中啓文「鑑定上から見た古和同銭の鋳造年代」『銭幣館11』昭和26年（1951)
5）鈴木秋男「皇朝銭雑記（一）～（十一)」『貨幣第44巻第6号～第46巻第6号』平成12～14年（2000～2002)
6）岡田村雄「十二銭時代」『東京古泉界報告第14号』明治29年（1896)
7）初期貨幣研究史に関しては、拙稿「日本初期貨幣研究史略―和同開珎と富本銭・無文銀銭の評価をめぐって―」『IMES DISCUSSION PAPER SERIES』No.2004-J-14、日本銀行金融研究所、平成16年（2004）を参照のこと
8）下間寅之助「異品銭之紹介　其十五　銅鋳古和同開珍銭」『古銭第2巻第7号』古銭雑誌社、大正7年（1918)
9）浜村栄三郎「日本貨幣史の研究（承前)」『貨幣第47号』大正12年（1923)
10）鷲田呆仙「和同銭の実物上に於ける年代別」『貨幣第52号』大正12年（1923)
11）田中啓文「鑑定上から見た古和同銭の鋳造年代」『銭幣館11』昭和26年（1951)
12）佐野英山『鋳貨図録』所載「天保六年江戸橋場鋳銭座絵図」蝶葉堂、大正2年（1913)
13）『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所、平成7年（1995)
14）石川　諄「和同開珎の製作の変遷」『方泉處』21号、平成10年（1998)
15）矢野　努「鋳銭実験」『アジア遊学』第18号、勉誠出版、平成12年（2000)
16）古代銭貨の鋳銭技術に関しては、拙著「富本銭の製作工程と鋳造技術」『ものづくりの考古学』平成13年（2001)。同「富本銭鋳造技術の復原」『わが国鋳銭技術の史的検討』平成15年（2003）を参照のこと